

# 2016年度 入学試験問題

# 国語

(1科目 100点 50分)

2016年2月12日(金) 1時限目実施

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この注意事項は、よく読んでください。
3. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
4. 次のことには十分注意してください。
  - ① 解答用紙には、受験番号を記入することを忘れないこと。
  - ② 答えはすべて解答用紙に記入すること。
  - ③ 不正行為はしないこと。

解答については、間違いのないように十分注意し、記入してください。

東 奥 義 塾 高 等 学 校

〔二〕 放送をよく聞いて、後の問いに答えなさい。  
※メモを取ってもかまいません。

〔二〕次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答にあたっては句読点や記号も一字として数えることとします。

食事というものは、いろいろな条件に制約された、文化という構造体の重要な部分である。何をいつ食べるか、それをどう食べるか、食べてはいけないものはなにかといったことに関して、どの国の食事にも、さまざまな制限や規則が習慣として存在する。

カトリック教徒は金曜日には獣肉を食べないし、イスラム教徒は、豚肉を<sup>※</sup>不浄なものとして決して食べないというようなことは、誰でも知っている有名な事実であろう。

しかしこのように、何かを食べてはいけないという明示的な規則は、外国人にも比較的判りやすい。ところが自分の国の食物と同じものが、外国の食事の中にありながら、その食物と他の食物との関係が、自国の食事の場合と違うという、つまり同一の食事全体における価値が、文化によって異<sup>ちが</sup>るときに、難<sup>むず</sup>かしい問題がおきるのである。

白い米の飯は、日本食の場合には、食事の①始めから終<sup>おつ</sup>りまで食べられる。というよりは、米飯だけを集中的に食べることは、(A)いけないこととされている。おかずから御飯、御飯からお汁と、あちこち飛び廻<sup>まわ</sup>らなければ、行儀が良いとは言えないのである。

そこで米の飯と他の食物との、日本食における関係は、並列的・同時的であると言えよう。お汁に始まり、<sup>※</sup>香の物に至るまで、米を食べてよいのである。ところが、食事の一段階<sup>こと</sup>に、一品ずつの食物を片付けていく、通時的展開方式の性格の強い食事文化もある。西洋諸国ではこの傾向が強く、イタリアの食事も例外ではない。ここでは麺類や米の料理などは、ミネストラと称して、本格的な肉料理が始まる前に、済ませてしまうのだ。

私が②ドンブリに盛られた白い御飯を見て、おかずも一緒に食べようと思つた失敗は、日本の食事文化に存在する或<sup>あ</sup>る項目を、別の食事文化の中に見いだしたため、これを自分の文化に内在する構造に従つて位置づけ、日本的な価値を与えようとしたことが原因なのであった。

文化の単位をなしている個々の項目(事物や行動)というものは、一つ一つが、他の項目から独立した、それ自体で完結した存在ではなく、他のさまざまな項目との間で、一種の引張り合い、押し合いの対立をしながら、<sup>※</sup>相対的に価値が決つていくものなのである。

自分の文化にある文化項目(たとえば或<sup>あ</sup>る種の食物)が、他の文化の中に見出されたからといって、直ちにそれを同じものだと考えることが誤りなのは、その項目に価値(意味)を与える全体の構造が、多くの場合違つているからである。

一般の人は自分の文化のこのような構造を意識もしないし自覚もしていない。そこで自分の文化に存在する項目が、それ自体(B)的な、どこでも通用

する価値を持つているように考えがちである。

この点は、ことばという、文化の重要な構成要素を正しく理解するために、極めて大切なことであるから、ことば以外の例を、もう一つだけ取り上げよう。日本人が友人知人に出会った時の、一番普通な挨拶は、おじぎである。ところが、その日本人が、この頭を下げる挨拶の代りに、西洋人は一般に握手をするということを知ると、誰彼の見さかいなく握手をするようになる。つまり頭を下げる挨拶と、握手とを、互いに等しい価値を持った行動と解釈するわけである。ところが、実際には、頭を下げる日本流の挨拶を、日本人同士の間でもよい場合のすべてが、握手で置き換えできるわけではない。たとえば、こちらが男であって、相手が婦人であるときは、先方が手を出すのを待つことが礼儀とされる国もある。出会った誰彼かまわず、こちらから握手することは、つまり誤解を生むことにさえなりかねない。

以上の二つの例から言えることは、私たちが異った文化に、しかも限られた範囲で接するときには、個々の文化要素を統括する全体の構造がつかめることは稀であり、多くの場合、自分が出会う一部、または特殊な実例を、一般的に拡大してしまう傾向があるということである。しかもこの一般化は、必ず自分の文化の構造に従って行われるということが問題なのである。

私たちが外国語を学習する際にも、いま述べたような具合に、自国語の構造を自分ではそれと気づかず、先ず対象に投影して理解するという方法をとるやうい。従っていろいろと喰違いが生じてくるのも当然である。

ごく簡単な例として、英語の break という動詞を考えてみよう。先ず、学校で「窓ガラスを割ったのは誰ですか」 Who broke the window? とか「あいつスキーで足を折った」 He broke his leg. などという例文から、break の使い方を学んだ中学生は、そうか覚えたぞ、break は「割る」とか「折る」という意味なんだと思込む。

そこで英作文の時間に、この知識を生かして、「昨日大きな西瓜を包丁で二つに割って、それから八つに切った」というようなことを、I broke a big watermelon in two with a knife and..... と正しく書いたつもりになると、先生から、こゝは break を使うのはおかしい、cut を使いなさいと直されてしまう。でも先生 break は「割る」んじゃないですかと言ったりすれば、それは時と場合によるので、③馬鹿の一つ覚えみたいなことは駄目だよと叱られたりする。

今度は「腕を折った」から応用して、折り紙、折り目などに break を使った、これも間違いで Fold と言えと教えられる。

次に電気を切る機械は、ブレーカーと言ひ、家のヒース・ボックスの中にあるということ、理科の時間に習って、そうか break は「切る」とも使えるのだなど、英語の時間に、「釘に洋服をひっかけて切ってしまった」と言ひつゝ、I broke my coat..... と言ひかけると、先生は、tear と言えと言ひ。

ついに腹を立てた生徒が、「先生、英語は滅茶苦茶ですね。理屈も何もありやしない」と怒れば、「ことばは数学などと違って、理屈だけでは駄目です。注意深く、勘を働かせて勉強しなければ」というようなことを先生が言う。生徒が自然な推理応用能力を発揮できないという意味では、④なまじ頭の良い生徒ほど、語学ができなくなるものである。

少し誇張したような話だと思われるかも知れないが、この中学生の悩みは、実は外国語学習者に、いつまでもつきまとう（C）的な悩みなのであり、大學生の書いた英作文でさえ、⑤この種の誤りでいっぱいと言っても、決して嘘ではないのである。

どうしてもこのようなことになるのかと言えば、ことばの意味や使い方には構造があつて、それが言語によって異ことなつていくという認識が、教える側に欠けているからである。

出典 鈴木孝夫 『ことばと文化』

※1 不浄……けがれていること。

※2 香の物……漬け物。

※3 相対的……他との関係において成り立つさま。

※4 top……紙や布などを折るという意味の英単語。

※5 ヒーズ……ヒューズ、電気回路を保護する電機部品。

※6 tear……ぼろぼろに引き裂くという意味の英単語。

問一 空欄（A）、（B）、（C）に入る語句として、それぞれ最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- |   |       |       |       |       |
|---|-------|-------|-------|-------|
| A | ア まさに | イ むしろ | ウ さらに | エ やはり |
| B | ア 社会  | イ 個人  | ウ 積極  | エ 絶対  |
| C | ア 全体  | イ 能力  | ウ 本質  | エ 消極  |

問二 傍線部①「始めから終りまで食べられる」は、本文中で別の表現になっている部分があります。その部分を十字で抜き出さない。

問三 傍線部②「ドンブリに盛られた白い御飯を見て、おかずも一緒に食べようと思った失敗」は、この後の部分で述べられている「挨拶の例」では、どのような失敗になっていますか。二十字で抜き出さない。

問四 傍線部③「馬鹿の一つ覚え」について、このようなことばを何というか、最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ことわざ    イ 故事成語    ウ 慣用句    エ 格言

問五 傍線部④「なまじ頭の良い」の「なまじ」の意味として、最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一所懸命で    イ 品行方正で    ウ 中途半端に    エ 完全無欠に

問六 傍線部⑤「この種の誤り」について、小さな子どもが「おなかいっぱいになった？」と聞かれたのに対し、「まだいっぱいじゃないよ」と間違えました。このことについて、ある生徒が次のようにまとめました。そのまとめの空欄を適切な語で補いなさい。

【まとめ】

本来、「いっぱいだ」は、「静かだ」や「さわやかだ」などと同じく（X）という品詞なので、「くない」に接続する場合には（Y）としなくてはならない。しかし、この子どもは、「いっぱい」という形から、「赤い」や「寒い」などの（Z）という品詞と同じだと考えてしまい、「赤くない」「寒くない」に合わせて、「いっぱいくない」としてしまった。

〔三〕次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答にあたっては句読点や記号も一字として数えることとします。

始皇帝によって統一された秦が崩壊すると、国々は分裂しお互いに争う乱世に戻ってしまった。その中で、楚の国を治める項王（項羽）と漢の国を治める漢王（劉邦）の二人が頭角を現し、互いに激しく争っていた。項羽は敵である劉邦の軍団を弱体化させるため、劉邦の將軍で斉の国を治める韓信を独立させ、さらには自らと同盟させようと計画し、韓信のところに部下である武渉を派遣した。

武渉は、いう。かつて秦が滅んだとき、項王は諸將に地を分け、あるいは王にし、また侯伯にして天下を安んじさせたのに劉邦のみは兵をおこして他人の領を侵し、すすんで項王に挑んだ。このために天下はみだれ、民は戦いの災禍に苦しんでいる。（A）漢王劉邦はその欲望を満足させるまで兵をやめようとはしない。項王はときに劉邦の生命も運命もともに掌中ににぎったことがあるが、相手をあわれみ、つい鳥を逃がすようにして逃がされた。漢王はそれ之恩にも着ず、危機を脱すると、また戦さを仕掛けてきた。こういう人間を信用できるか、と武渉はいう。

「あなたも漢王についているかぎり、行く末は縛められて虜として引き出されるだけだ」  
さらに、

「漢王は項王というおそろしい敵がいる。だからこそ漢王はあなたの武を必要とし、あなたを殺さない。あなたは項王によって生かされているようなものだからともいった。

「あなたの生きる道は、一つしかない。漢に反いて楚と提携し、天下を三分してその一を得ることである」  
ともいう。武渉は自分の言葉に酔い、卓をあげしく搏った。

「休息なさいますか」

※<sup>1</sup> 蒯通は、韓信にいった。即答せず、休息して武渉が持ちかけたはなしを慎重に検討する必要があるのではないか、という意味をふくませていったのだが、韓信はその必要をみとめず、

「おうけできなくて残念なことである」  
と、結論からいってしまった。

「なぜだ」

武渉も、相手のあまりの単純さにおどろいた。

「私は項王のおおせを畏み、千里の道をこのようにしてやってきた。であるのに、一考もせず、即座にお断りになるとはどういうわけだ」  
理由か」

韓信の感情がにわかに激してきたことが、その大ぶりの横顔に散るように血色がひろがったことでもわかる。

①私は、項王がきらいなのだ」

「きらいとは、これは婦女子のような言葉を」

武渉も、※<sub>4</sub>狼狽している。

「なぜお嫌いなのです」

②武渉のことばが、丁寧になった。

「私を用いなかったからです」

韓信は、自分が楚の軍営にいたとき、身分は※<sub>5</sub>郎中にすぎず、しごとといえば宿衛の時の番士にすぎなかった、といった。

「進言、献策、一つとして用いられたことがない」

「項王がお忙しかったからでしょう」

「当時、忙しかったのは、項王だけではない」

敗者にちかひ漢王はそれ以上に多忙だった、と韓信はいう。

「では、漢王については、※<sub>6</sub>如何」

武渉は、問うた。

「好きです」

「理由は？」

「私を用いてくれたからです」



それだけだ、と韓信は言い、袖でもって目の前の※卓子を拭いはじめた。韓信が考えごとをしているときなどの癖で、丹念に拭き、さらにふき、顔が映るほどにみがきあげてしまう。拭いている所作は、これだけの男でありながらどこか怨をふくんだ婦人のような印象がある。

「士というものは、そういうものだ」

韓信は、しずかにいった。

「漢王は私に上將軍の※印綬をさすけ、みずからの軍を割いて幾万という兵をあたえてくれた。それだけではない。ときに自分が着ている衣をぬいで私に着せ、ときに自分が食べている食物を押し私に食べさせてくれた。さらにはわが進言を聴き容れ、わが計画を用いてくれた。それがなければいま齊の地に韓信という人間が存在していない。あなたは項王の使いとして千里の道をきた。以前の韓信に会うためではなく、現在の韓信に会うためだが、その韓信ができあがったのは項王によるものかどうか」

さつらんに、

「渉とやら」

と、よびかけた。

「あなたは以前の私を知っているという。以前の私なら、項王の使いとしてあなたはやってきたかどうか」

「つまりは……」

武渉は言いかけたが言葉をうしない、※いたずらに汗を流し始めた。むやみに頸のふとい男だった。その頸が、栄養の足りた肩のなかに沈んだようになり、顔が汗のなかでふらさがっている。交渉は失敗におわりそうであった。かれは、項王への言いわけを考えはじめていた。

「項王を憎んでおられるわけだな」

「なにを憎むことがあるう。(B)、用いてもらえなかったということだけだ」

韓信は笑顔にもどっている。

「よくわかった」

べつに理解できた顔つきではない。武渉はさすがのような顔つきになり、

「いま伺ったことは、水に流してもらって」

と、いった。

「流せないのだ。忘れることができても、流すことはできない。過去というものが積みかさなつてこんにちの韓信というものがある。流せということは韓信そのものを流せということだ」

「そこを」

武渉は手を<sup>※1</sup>拱き、たかくかかけて韓信に<sup>※2</sup>拝礼して、

「なんとかありませんか。旧知の武渉がこのようにしてあなたを<sup>※3</sup>拜んでいる。そのところを、なんとか考え直して……」

「私は死んでも漢王に対する<sup>※4</sup>節操は変えない」

韓信は言いきつてしまい、

「項王よろしくお伝えねがいたい」

と結んだ。

交渉は終わった。

③韓信は武渉との席では<sup>※5</sup>酒肴すら用意していなかった。

武渉をかえしたあと、さすがに疲れてひとり部屋にこもつた。韓信は独り居ることを好み、作戦を考えるとときも部屋をしずかにして独居し、軽い酒を<sup>※6</sup>爵という酒器にみたしてすこしずつ飲みながら思索した。

蒯通はその癖をよく知っていた。<sup>※7</sup>女孺に命じて爵をもたせ、自分は酒壺をもって部屋へ入つた。韓信は茫然としている。爵を左手にもつて酒をつがせたが、目はうつろであつた。

女孺は去つたが、蒯通はのこつた。

「君よ」

と、蒯通は韓信に対し、あまり例のない<sup>※8</sup>尊称でよんだ。

「なんだ」

韓信はそこに蒯通がいることに驚き、

「蒯先生か。なにか事でもおこったか」

と言いつつも、その目は他のことでもさまよっている。じつのところ、韓信は項羽からの誘いの使いがくるほどの自分になっていることに新鮮に驚いていたが、その実感に重心をつけてうまく精神の底に沈めることができずにいた。あの答えでよかったかというたぐいの迷いではなかった。自分のあらたな実像をつかんで懐ろにねじこむだけの処理をおかねば、このさき乱世での日常を送ることができない。

④蒯通は、韓信の心理がよくわかっていた。

(いい男だ)

と思う反面、いらだたしかった。これでは天下はとれまい。

出典 司馬遼太郎 『項羽と劉邦』

※1 侯伯……侯爵や伯爵の位。

※3 蒯通……韓信の部下で、主に外交を担当していた。

※5 郎中……主の身边を警護する近衛兵。

※7 卓子……机。

※9 いたずらに……無駄に。空しく。

※11 節操……信念。主義。

※13 女孺……女性の召使い。

※2 掌中……自分のものとして自由にできる範囲。

※4 狼狽……慌てふためく。

※6 如何……どうですか。

※8 印綬……部下に印章を授けることで官職の証とした制度。

※10 拱き……両手の指を胸の前で組む。

※12 酒肴……お酒と簡単な料理。

問一 空欄(A)～(B)に入る語句として、それぞれ最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- A ア 一方で イ さらに ウ だから エ しかし  
B ア 決して イ ただ ウ 結局 エ あるいは

問二 傍線部①「私は項王がきらいなのだ」とありますが、その理由を漢王との違いを明確に述べながら、本文中の語句を用いて五十字以内で答えなさい。

問三 傍線部②「武渉のことが丁寧になった」とありますが、この時の武渉の心情として、最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- A 韓信が怒って、交渉が決裂しそうだと感じた。  
イ 韓信が混乱し、自分が殺されそうだと感じた。  
ウ 韓信に疑われ、自分の本心がばれたと感じた。  
エ 韓信に騙され、逆に利用されそうだと感じた。

問四 傍線部③「韓信は武渉との席では酒肴すら用意していなかった」とありますが、それはなぜか、本文中の語句を用いて四十字以内で答えなさい。

問五 傍線部④「蒯通は、韓信の心情がよくわかっていた。(いい男だ)と思う反面、いらだたしかった。これでは天下はとれまい」とありますが、この時の蒯通の心情として、最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- A 天下を取るためには、劉邦のように自身の野望を満足させるため戦を起こし、人を裏切ることも必要だと考えている。  
イ 天下を取るためには、項王と手を結び自身の勢力を広げた上で、正々堂々と天下取りの戦をするべきだと考えている。  
ウ 天下を取るためには、韓信にはまだまだ学ぶべき事が多すぎて、今すぐには決戦をすることはできないと考えている。  
エ 天下を取るためには、劉邦や項王を油断させて、暗殺する必要があるのだが、韓信にはそれができないと考えている。

〔四〕次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答にあたっては句読点や記号も一字として数えることとします。

今は昔、※<sup>1</sup> あべのなかまろ阿倍仲麻呂といふ人ありけり。遣唐使けんとうしとしてもものを①ならはしめむが為かに、②彼の国に渡りけり。

習わせるために、

あまたの年を経て、え帰り③来たらざりけるに、④この国より藤原清河ふじわらのきよかわといふ人、遣唐使として行きたりけるが、帰り来たりける長い年月が流れ、帰ることができなかったところ、

に伴なひて、「帰らなむ」とて※<sup>2</sup> めいしゅう明州といふところの海のほとりにて、彼の国の人はなむけ餞しけるに、夜になりて月のいみじく明かりける送別の宴として

を見て、はかなきことにつけても、この国のこと思ひ出いでられつつ、恋しく悲しくと思ひ⑤ければ、この国の方を眺めて、かくな何かにつけても、

むよみける。

天の原 ふりさけ見れば かすかなる ※<sup>3</sup> 三笠の山に出でし月かも  
仰ぎ見ると 出でいた月なのだなあ

と⑥こひひて⑦なむ泣きける。

※1 阿倍仲麻呂……遣唐使として派遣され、帰国することなく死亡した。文名が高かった。

※2 明州……中国の地名とされる。

※3 三笠の山……奈良県春日の地にある山。

【解説】

『今昔物語集』は「今は昔」で始まる物語を集めたものである。その話のジャンルは多岐にわたり、歴史的な話や仏教的な話、怪異的な話などさまざまである。

この章は、遣唐使として派遣された阿倍仲麻呂が故郷に帰りたいたいと思いつつも帰ることができず、海に浮かぶ月と奈良県春日の三笠山に出る月を重ね合わせて和歌をよんだという話が収められている。

問一 傍線部①「ならはしめむ」・⑥「いひて」の読みを現代仮名遣いで、ひらがなにして答えなさい。

問二 傍線部②「彼の国」・④「この国」について、それぞれの国名を答えなさい。なお、②は漢字一字、④は漢字二字で答えなさい。

問三 傍線部③「来たら」・⑤「けれ」について、活用形を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 未然形    イ 連用形    ウ 連体形    エ 已然形

問四 傍線部⑦「なむ泣きける」について、ここの「ける」は「なむ」の影響を受けて形が変化しています。このような法則を何というか、答えなさい。

問五 ある生徒が【解説】を参考にしながら、この文章の内容を次のようにまとめました。(A)に入る具体的な内容を二十五字以内で書きなさい。

この話は、阿倍仲麻呂が (A) という話である。

〔五〕 次の各問いに答えなさい。

問一 次の①～⑥の傍線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに、それぞれ書き改めなさい。

- ① レンタイ責任を問われる。      ② 中学のカテイを修了する。      ③ 内閣がシユシヨウを指名する。
- ④ 行動を省みる。      ⑤ 罪悪感を覚える。      ⑥ 納屋に道具をしまう。

問二 次の四字熟語の間違いを指摘し、漢字で訂正しなさい。

- ① 起承点結    ( )    ↓    ( )      ② 自我自賛    ( )    ↓    ( )      ③ 異句同音    ( )    ↓    ( )      ④ 危機一発    ( )    ↓    ( )

問三 次の空欄に入る動物名を、語群から選び、答えなさい。

- ① 立つ    ( )    後を濁さず。      ②    ( )    の手も借りたい。      ③ 竹    ( )    の友。      ④    ( )    雪の功。

語群 「犬 羊 鳥 鹿 象 猫 虎 馬 蜂 蝶 蛍 牛」

問四 次の敬語の表現として正しい方を選び、記号で答えなさい。

- ① うちで夕食を（ア）お召し上がり    イ いただいて（ ）ください。
- ② 近くまで（ア）いらっしやい    イ 参り（ ）ましたら、どうぞお寄りください。
- ③ 初めて（ア）お会いになれて    イ お目にかかれて（ ）光栄です。



# 国語解答用紙

※印の欄には何も記入しないこと

〔一〕 10点

2 問一

によって変わるものではない。

〔二〕 25点

2 × 3 問一  
A  
B  
C

2 問四

〔三〕 24点

2 × 2 問一  
A  
B

2 問六 X  
3 Y  
2 Z

〔四〕 20点

7 問二  
50

〔五〕 21点

3 問五  
3 問三  
7 問四  
30  
40

2 × 2 問一  
①  
⑥

2 × 2 問二  
②  
④

2 × 2 問三  
③  
⑤

3 問四  
の法則

5 問五  
25  
15

〔五〕 21点  
①  
②  
③  
④  
⑤  
⑥

〔二〕 25点

2 × 4 問二  
①  
↓  
②  
↓  
③  
↓  
④  
↓  
⑤  
↓  
⑥

〔三〕 24点

1 × 3 問四  
①  
②  
③

〔五〕 ※

〔四〕 20点

1 × 4 問三  
①  
②  
③  
④

〔四〕 一・二・三・四 ※

1 × 4 問三  
①  
②  
③  
④

〔三〕 二・四 ※

1 × 4 問三  
①  
②  
③  
④

〔三〕 一・三・五 ※

1 × 4 問三  
①  
②  
③  
④

〔一〕 二・三・六 ※

1 × 4 問三  
①  
②  
③  
④

〔二〕 一・四・五 ※

1 × 4 問三  
①  
②  
③  
④

〔一〕 ※

受験番号

※

これから、放送による聞き取りの試験を行います。まず、福沢諭吉の『学問のすゝめ』の一部を現代語に訳したものを読み、次にその内容について、いくつか質問をします。文は一度しか読みませんので、必要に応じてメモをとっても構いません。それでは、約一分後に開始しますので、問題用紙や解答用紙に不備があった場合には、監督者に申し出て交換してください。

### 【一分】

それでは、始めます。

おおよそ人間であれば、豊かな者も貧しい者も、強い者も弱い者も、人民も政府も、その権利に関しては、すべて平等である。

(中略)

国家とは、人民が集まったもので、日本の国は日本人の集まった国である。イギリスはイギリス人の集まった国である。日本人もイギリス人も、同じように天地の間に生まれ育った人間なのであるから、お互いにその権利を妨害してよい理由はない。人間が他の人間に害を加えてよい理由はない。ましてや二人の人間が他の二人の人間に対して害を加え、権利を侵してよい理由はない。この考え方は、百万人、千万人の場合も同様で、それらの理由は人数の多い少ないによって変わるものではない。

いま世界を見渡すと、文明が進歩し、学問も軍備も発達し、豊かな国もあれば、文明が未開発の、文化や軍備の遅れた貧しい国もある。一般的にみて、ヨーロッパやアメリカの国々は豊かで力があり、アジアやアフリカの国々は貧しくて力がない。しかしながら、これらの貧富強弱の差は、各国それぞれの実状によるものであり、国情によって差があるの言うまでもないことである。

ところで、仮に自国の豊かで力があることをいいことに、その勢いで貧しく力のない国に無理難題を押し付けることがあるとしたらどうだろうか。それはまるで相撲の力士が腕力で病人の腕をへし折るようなものである。これは国家の権利からいっても、許されない横暴な行為である。

(中略)

貧富の差や力のあるなしは、決して天から定められた運命ではない。人間が努力をすらかしないか、その結果によつて、今日愚かであつても明日は賢くなることができるし、昔、豊かで力を誇った者も、今や貧しい弱者になるかもしれないのである。過去の歴史をみて、そうした例は少なくない。

我々日本人は、ただちに学問に志し、気持ちをしつかりと持つて、まず個人としての独立を図るべきである。そこから国の豊かさや力強さは生まれる。

【三秒】

それでは質問をします。解答は全て解答用紙の定められたところに記入してください。

【三秒】

問一 筆者は、人間は、いつ、いかなる場合においても、その権利に関してはどうあるべきだと考えていますか。

【十五秒】

問二 筆者は、人間はお互いにそれぞれの権利を侵してよい理由はないといっていますが、その理由はどうかあるべきだと考えていますか。解答用紙に示した文に続くように答えなさい。

【十五秒】

問三 筆者は、貧富の差や、力のあるなしは、天から定められた運命ではなく、何によってもたらされると考えていますか。

【十五秒】

問四 筆者は、日本人は、まず何をすべきだといっていますか。次のア・イ・ウ・エのうち、最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 学問を志し、全体としての統一を図る。
- イ 学問を志し、全体としての調和を図る。
- ウ 学問を志し、個人としての独立を図る。
- エ 学問を志し、個人としての発展を図る。

【五秒】

これで、放送による検査を終わります。では、後の問題が続けてやりなさい。